

テーマ

" はじめての… "

特集

～平和～

From Editor

皆さん、京都・広島旅行はいかがでしたか？来日学生や派遣学生と、色々なお話をする良い機会だったのではないのでしょうか。

さて、今月のR²のテーマは「はじめての…」です。外国ではじめての買い物、はじめての電話、等など留学生活が始まると、皆さんにとってはじめて経験することが山のように待ち構えています。僕達 ROTEX も皆、留学が始まった当初は初めて経験することづくでした。今回はそんな外国でのハラハラドキドキなエピソードを、ROTEX がそれぞれ綴りました。ぜひ、参考にしてみてくださいね。



USA

はじめの第一歩

おおぬま えり

大沼 恵理 (2006 年度派遣)

私が体験したカルチャーショックとして、アメリカ人の電話回数の頻度があります。HF の交友関係が広がった、ということもあるでしょうが、お世話になったどの家でも、電話が1日に何回も何回も鳴っていました。

2 件目の HF にお世話になっていた頃です。家族の誰も家におらず、留守番をしていたときに電話が鳴りました。今考えれば英語ができない私が電話に出る必要性などみあたらないのですが、その時私は「ああどうしよう!! 電話鳴ってる!!」とあわてふためいてしまい、結局受話器を取ってしまいました。英語で、そしてアメリカで電話に出るなんて初めての経験です。最初の「Hello」にすら勇気がいりました。幸い電話の相手はホストママのお母さん(ホストおばあさん)。最初はおばあさんも驚いていましたが、お互い知った相手であったため、はじめての電話は幸い無事に終わりました。

「ごめんなさい。今日留守番中に電話に出ちゃったの。」

HF の帰宅後、私は正直に HF に報告しました。ホストパパが目を大きく見開いてこっちを見えています。

「何!? 恵理が電話に出ただって!?!」

私は内心ビクビクです。HF とは言えど、勝手に人のうちの電話に出たのですから。

『怒られるっ…』

しかしパパの次の言葉は意外なものでした。

「すごいじゃないか! よし、これからは留守番中恵理が電話に出なさい。」

2ndHF は、英語がなかなか上達しないことで私が悩んでいること、英語でコミュニケーションをとることに對して私がとても臆病であることをよく理解してくれていました。だからこそ、私にとって英語を話すいい機会になると、電話に出ることを許可してくれたのです。実際、私は電話に出ることをきっかけに、だいたい英語で話す自信をつけることができました。

勝手に人の家の電話に出ることはあまりよろしくありませんが、あのとき電話に出た経験は、私にとって大きな一歩であったことは間違いありません。



CAN

はじめてのドキドキを楽しもう

もちづき ひとみ

望月 瞳 (2007 年度派遣)

それは、10月中旬のある日のことでした。ハロウィン(毎年10月31日にある、聖者を祭る日)が近く、街はにぎわい、家々でも飾り付けが行われていました。学校では友達がハロウィンパーティーを開こうという話をしていて、私も密かに「良いなあ」と思いながら聞いていました。その時の私はまだ消極的で自分から行きたいとはとても言えなかったのですが、優しい友達は、「あなたも来て良いのよ!」と誘ってくれ、ハロウィンの翌日11月1日に友達とハロウィンパーティーを開くことになったのです。

当日、私はとても緊張していました。それは私にとって初めて行く外国のパーティーであったのと同時に、初めて友達と遊ぶ日だったからです。英語も片言で、元々そんなに騒がしい性格でもない私が友達とどうやって長時間コミュニケーションをとれば良いのだろう?と、とても不安だったのを覚えています。しかし、いざパーティーが始まるとそんな不安はどこかに吹っ飛んでしまいました。みんなでホラー映画を観たり、写真を撮ったり、ピザを食べたりと、英語が片言でも、少しシャイでも、自然に楽しめるひとときでした。

私は、この「はじめてのパーティー」を通して友達との距離を縮めることができたし、留学の楽しさも少しずつ実感できるようになりました。留学中は「はじめて」づくしで疲れてしまうこともあるかもしれませんが、そんなドキドキの中には楽しいものもたくさんあるし、良い思い出になるものもたくさんあります。皆さん、是非多くのドキドキを体験して、留学を楽しんでください!



CAN

壁を越えて得た喜び

たかく さなえ
高久 早苗 (2005 年度派遣)

私の最初のホストファミリーは毎年学生を預かっていて、私で7人目の受け入れ学生でした。それなので学生の扱いには慣れていて、ホストシスターやブラザーと同じように接してくれました。一緒に暮らす上では非常に嬉しいことだったのですが、その徹底ぶりに何度か困ってしまったことがありました。

私はカナダに着いてから10日後くらいにロータリーからお小遣いをもらいました。毎月のお小遣いは、チェック（小切手）で渡されていたので、それを銀行口座に振り込むために銀行窓口へ行かなければなりませんでした。どうやってチェックを振り込めばいいのかわからなかったのも、ホストママと一緒に銀行に来て欲しいという意味を込めて「このチェックはどうすれば良いの？」と聞いたのですが、ホストママの返事は「銀行へ行けば良いのよ」というものでした。私は一緒に来てくれると返してもらえると期待していたので、少しびっくりしてしまい「ありがとう」と返すことしか出来ませんでした。

とにかくいつまでもチェックを手元に置いていても仕方がないので、次の日に銀行へ行きました。今までバイトもしたことがなく、銀行の窓口へ行くのは生まれて初めてだったのでごく緊張していたのを覚えています。幸い私のステイした町は人口4000人の小さな町だったので、誰もがロータリー留学生を知っていました。銀行の窓口の担当の人も「あなたが新しい留学生ね。カナダへようこそ！」と言ってくれて、特にトラブルもなくお小遣いを振り込むことが出来ました。ホストファミリーにとっては、留学生もその国で1年間を過ごすのだから、自分の事は自分で済ませるのは当たり前と考えていたようです。

その他にも、初めて郵便局へ荷物を出すときも一人で荷物を持って行ったし、電話のためのフォンカードも自分でお店の人に聞いて買いました。最初のホストファミリーの放任主義のおかげで最初の1ヶ月で日常生活のほとんどを自分でこなせるようになったと思います。毎回新しく自分で出来るが増えるたびにカナダで生活をする上での自信へとつながりました。

留学生活ではたくさんの壁に当たりますが、その壁をひとつひとつ越えることで自分への大きな自信になると思います。それは私のように小さな日常生活から、自分の目標達成という大きなものまで様々であると思いますが、その壁は大きいほど超えたときの喜びは大きなものです。みなさんには1年間でたくさんの壁を越えて、たくさんの喜びをして欲しいと思います。



AUS

間違えても、いいんだ

いしがき しずか
石垣 静香 (2006 年度派遣)

オーストラリアでは学校へ行く時『スクールバス』を利用します。1件目のHFの家から学校までは車で10分程の距離だったので、最初の数日間はホストパパが毎日学校まで送ってくれていたのですが、どうしても日本では珍しいスクールバスに乗って通学をしてみたかったのでHFにお願いして、2ヶ月間スクールバスに乗って学校へ通いました。

HFの家は、市のはずれに位置していました。HFの家は牧場経営で、近所は皆牧場で隣の家が見えないくらい1つの家の敷地が広大だったので、バス停というものはありませんでした。なのでスクールバスに乗る場合、家の前で待っていればバスは止まってくれるというものでした。オーストラリアに着いて間もなかったので言葉もうまく通じず、何一つ自分でできないと思い込んでいた時、初めてスクールバスに一人で乗れた日は、「言葉がうまく通じなくても自分でもできることはあるんだ。」と元気づけられ嬉しくなりました。「バスに乗る」という些細なことだったのですが、一人でバスに乗り、無事に学校に来て帰れた日は本当にうれしかったです。ホストママは私を心配してその日は早めに仕事を切り上げて私を自宅で待っていてくれました(笑)

2件目のHFの家は1件目のHFの家とは違い、窓を開けたら隣の家が見えるような住宅地に位置し、近所にはスクールバスに乗って通学する学生がたくさんいました。そのため近所にはたくさんのバス停があり、朝は何十台とバスが止まるほどでした。この光景を見た時、私は不安が過ぎりました。私は事前に何度もHFや学校の先生とスクールバスの確認をしました。

HFをチェンジしてから初めてスクールバスに乗る朝、ホストパパは私をバス停まで送ってくれ、「来たバスに乗れば学校に着くよ。大丈夫!」と言ってくれたのですが、案の定私は違うバスに乗ってしまいました。遠回りでしたが運良く学校に辿り着きました。この時期は多少英語にも慣れていたのでバスに乗る前に確かめるべきだったと思いました。それに1件目のHFの家では一人でバスに乗れたのに、「一人でバスに乗る」という当たり前であることができなかったのが本当にショックでした。

このように2つの「スクールバスストーリー」を比較するとわかるように「言葉が通じないからできない」ということは無く、「言葉が通じても間違える」ということはあるのです。派遣されると現地では、日本ではしたことのないことにたくさん出会うでしょう。『留学』だってみんなにとって初めてのことだと思います。初めてすることは誰だって緊張し不安もあると思いますが、「言葉が通じないからできない」ということは絶対に無いので、何事にも積極的に挑戦してほしいです。さらに間違えたからと言って落ち込む必要はなく、次から気をつければいいのです。「人は間違えて覚える」ともいいますし、間違えた方が学ぶことが多いはずです。留学生活中で出会う新しいことは、私たちを大きく変え自分を成長させると思います。留学を実りのあるものにするためにも派遣学生の皆さん、勇気を出して頑張ってください。

～特集～



平和

和平 …Chinese
Peace …English
Paix …French
평화 …Korean
Paz …Portugues
мир …Russian
Fred …Swedish

今月の特集は、平和です。留学中は特に、平和について考えさせられる機会が多く訪れると思います。実際にあつた ROLEX の体験談を読んで想像を膨らませ、参考にしてみてください。



USA

日本人としてできること

おおぬま えり

大沼 恵理 (2006 年度派遣)

留学していた1年間。あれほど戦争を身近に感じたことはなかった。特に戦争を身近に感じたエピソードがある。

第3HFのお宅にお世話になっていた頃である。よく晴れた日曜日、ゆったりとした午後の時間に一人の若い男性が訪ねてきた。ホストパパが彼と話をしている。すこし離れた所にいた私。聞き取れたのは「君のことを私たちはとても誇りに思っているよ。」

という言葉。その若い男性が去った後、ホストパパが教えてくれた。

「彼はこれからイラクに行くんだ。それで挨拶に来たんだよ。僕たちは彼をととても誇りに思っているんだ。」

それを聞いた瞬間、私の頭は大きく混乱した。

誇りに思う？何故そんなことが言えるの？戦地に行くってことでしょうか？人を殺さなきゃならないってことでしょうか？もう帰ってこない、会えなくなるかもしれないってことでしょうか？

パニックになった頭で、私は何も言うことができなかった。

翌日、ご近所中（もちろんHFの家も）が黄色いリボンで飾られていた。大きな布で作られた看板があり、手書きのメッセージが書かれている。

『ジャック（仮名）へ

私たち家族はみんな、あなたがイラクへ行くことを決意したということに誇りを持っているわ！気をつけて行ってきてね。たくさんの神のご加護がありますように！

あなたを愛するママ、パパ、お姉ちゃんより』

そばにいたホストママがそれを見て、私に教えてくれた。

「ほら、今度ご近所の男性がイラクに行くことになったじゃない…。だから、彼が無事戦地から戻ってくることを祈って、ご近所中で黄色いリボンを飾りつけているのよ。」

また何も言えなかった。虚しすぎて。悲しすぎて。ただ私は心の中で思っていた。

『彼が戦地から無事に帰ってくることを祈るなら、それは神に祈ることじゃない。神の加護でどうこうできるものじゃない。大切な人ならちゃんと伝えてよ。あなたが戦地へ行くなんて嫌だって。あなたともう会えなくなるなんて耐えられないって。愛しているなら止めてあげてよ。そんな危険なところに行かないで。』

そのときも私は何も出来なかった。何も言えなかった。急に目の前に訪れた、「戦争」を受け止めることが出来なかった。ただただ悲しくて、虚しくてしょうがなかった。家族を戦争へ送り出すという環境があるという現実が、悔しくてしょうがなかった。

あのとき私は何も出来なかった。日本人として伝えられることがあったはずなのに。戦争の虚しさを、戦争で愛する人を失う虚しさを。日本で18年間教育を受け、広島にも行った私が伝えられるメッセージ。私は伝えられたはずである。戦争で家族を失った人の悲しさを。学校の授業や、ドキュメンタリー番組で知った、悲しい戦争のエピソードを。あのときちゃんとそれを伝えられていたならば、話す勇気を出すことができていたならば。深く家族に愛されている人が戦地に行くことを、止めるきっかけぐらいになることができたのかもしれない。それだけの価値が、日本人である私にはあったのかもしれない。



TWIN

教科書の裏側には・・・

たかはし やまと
高橋 耶真人 (2007 年度派遣)

さて、今回のテーマは「平和」について Rotex 懇談会でも行いましたが、「平和」については答えというものが存在しないので、ここでは1つ、ぼくの体験談を書こうと思います。

ぼくは台湾で澎湖諸島へ旅行に行ったときに、天后宮という台湾で古いお寺で旧日本軍として戦闘に参加した台湾人のおじいさんに会いました。おじいさんは日本人が来てくれたという事でとても喜んでくれて、当時自分は志願兵として戦争に参加して、今でもそれを誇りに思っている、と話してくれました。

日本の教科書ではせいぜい1,2 ページで「台湾は日本に植民地化されて、戦争末期には多くの台湾人が強制的に徴兵された」等と書かれているだけですが、中にはこのおじいさんの様な人もたくさんいたわけです。話を聞いていると、当時は日本人になりたい、日本(大東亜)の平和のために戦いたい、という日本に対し強い憧れのようなものもあったみたいです。

戦前の日本は平和とかけ離れた想像をする人もいますが、彼らには彼らなりに平和を求めて闘っていました。またそれは同時に、平和というものは戦争があるからこそ、その対極として存在しているとも言えます。

戦争と平和についてはもちろん、国によって(人にもよりますが)感じ方も考えた方も様々です。例えば現代日本の転換期ともなった第二次大戦についても世界の国の人たちはどう感じているのか、それを知ることはその国についての理解をさらに深めるのはもちろん、世界の中での日本を知る上でも良い経験になると思います。個人的にも興味があるので是非たくさん身に付けて帰国後に聞かせてくださいね。



R²は当 2780 地区多くの ROTEX の方々、
ガバナー事務所の協力を基に発行されています。
多大なる尽力に感謝いたします。

R² 編集長：杉岡 美季
(2005 年度韓国派遣)

編集部だより

みなさんこんにちは。今月号から新しくなった「編集部だより」です。ここでは R2 メンバーからのメッセージやこぼれ話、マメ知識やクイズなど様々なことをおもしろ、おかしく紹介していきたいと思っています。

ロータリーのビッグイベントのひとつ、広島・京都旅行はいかがでしたか？私も同行させていただきましたが、チラホラと桜も咲き始めとても日本らしい趣のある風景を楽しむことができましたね。またその地の名物が使われたお料理もみんなでおいしくいただきました。

さて今回はそんなおいしいお食事の席で、ある ROTEX より出題されたクイズをみなさんにもご紹介したいと思います。

<問題>

「0、1、2」この3つの数字を足したり引いたりかけたり割ったりして、最も大きい数字を作ってください。※数字は一回づつしか使えません。

答えは来週のこの欄で。

では、みなさん新学期がそろそろはじまるころと思いますが、気を引き締めてガンバリましょう。春休みボケなどないようにしっかりと頭を使ってクイズ解いてくださいね。



DIRECTOR : MIKI SUGIOKA

EDITOR : MASAHIRO ISHIWATA

SUPPORTER : ERI OHNUMA, AKITO TACHIIRI

Copyright©2005-2009

RIDistrict2780ROTEX All rights reserved